

生涯にわたって継続される趣味としての演奏活動の実態

—— 「活動を継続する難しさ」に着目して ——

Music Performance Activities as a Life-long Hobby:

Focusing on the “Difficulty in Continuing Activities”

船越理恵

Rie Funakoshi

抄 録

本研究の目的は、生涯にわたって継続される趣味としての演奏活動（以降、生涯的な演奏活動）において、継続の難しさがどこにあるのかを捉え、特に活動形態の違いによって継続の難しさにどのような影響が生じるのかを明らかにすることにある。具体的には、これまでの人生において仕事とは関係のない演奏経験がトータル5年程度以上あり、且つ、今現在も何かしら演奏を続けている個人703名を対象に実施したアンケート調査の結果より「演奏活動を継続する上での難しさ」に関する自由記述回答に着目し、活動継続における難しさをあらゆるカテゴリを生成、その上で活動形態別にこれらのカテゴリに対する回答数を集計し比較した。分析の結果、活動継続における難しさは11のカテゴリに整理され、それらを成す5つの根源的な要素が考察された。また活動継続における難しさは、演奏活動形態を問わず広く全体に通じる側面と、活動形態の違いに左右される側面とがあり、後者については、とりわけ活動のベースとなる人数規模の違いや、具体的な演奏内容（種目）の特性に依拠することが明らかとなった。

〔キーワード：趣味、アマチュア、演奏活動、生涯音楽学習〕

1. はじめに

超高齢社会国である日本において、趣味を持つことによって享受する人生の豊かさへの関心は高い。『高齢社会対策大綱』（2018）を参照すると、趣味の活動は、生涯学習社会の実現に向けた社会参加活動を促進する手立てとして位置づけられている。趣味の活動の活性は、人々の人生の充実を長期的に促していくうえでもはや欠かせないものと考えられる。

多様な趣味の活動がある中で、こと音楽に関わる活動が個人の趣味に位置づけられることは、決して珍しい選択ではない。平成28年度の『社会生活基本調査』によると、楽器の演奏を娯楽・趣味に位置づける人口は1,240万人であった。つまり日本では10人に1人が

何らかのかたちで楽器演奏を余暇活動に位置づけており、かつその人口は増加傾向にある。平成28年度の楽器演奏人口と平成23年度の同調査におけるそれとを比較すると、およそ150万人の増加が認められている。

演奏という趣味活動は基本的に、一回限りのイベントではなく、長期的な継続のもとに取り組みされる。何を演奏するにも、基本的な奏法の習得が不可欠であり、それには一定の期間、継続的な練習が必要となる。また「余暇活動は継続性を伴って初めて趣味となる」（杉山 2022）といった指摘があるように、音楽に限らず趣味の活動はそもそも継続的な追求を前提とする性質を有する。すなわち継続されてはじめて演奏活動という趣味が成り立つのであり、演奏活動が継続されることで、生涯の趣味としての円熟味がよりまして

いくと考えられる。

個人の人生において長期的に継続される音楽活動に着目した先行研究としては、杉江淑子による生涯を通じた音楽との関わりの変遷や、成人の音楽関与に関する一連の研究（杉江 1990, 1995, 2001, 2004, 2006, 2009）、生涯を通して音楽と関わり続ける人々の音楽経験の分析を通じて、音楽教育が及ぼす長期的な影響についての洞察（Pitts 2012）、過去の音楽経験と演奏技術の熟達に焦点化した議論（Manturzewska 1993; Sloboda, Davidson, Howe and Moore 1996; Jorgensen 2001）などが挙げられる。しかしながら生涯的な演奏活動が具体的にどのように継続され、深められていくのか、趣味として活動を続けるアマチュア演奏家における音楽人生の発達や成長をいかに支援するかということについては、これまでほとんど議論されてきていない。

生涯的な演奏活動における継続の実態を明らかにし、活動支援のあり方に関する具体的な検討へとつなげていくことは、生涯学習時代における音楽の意義や可能性を拡張する重要な議論に位置づけられるだろう。そこで拙稿（2021）においては、生涯的な演奏活動が「ブランク」を伴いながら継続される断続的な取り組みであることを確認すると共に、断続構造を生成する「ブランク」の生じ方について考察を行った。本稿は当該拙稿（2021）の後続研究に位置づけられるものである。具体的には生涯的な演奏活動における継続の難しさがどこにあるのかを捉え、特に活動形態によって継続の難しさにどのような相違があるのかを明らかにすることを通じて、生涯的な演奏活動の実態をさらに詳らかにすることを目指したい。

なお「趣味」とは多義的な用語であるが、本稿においては、杉山（2016）の示す定義「ある人が生活に必要な収入を得ることを目的とせず自発的に参加する余暇活動で、特に専門的かつ長期的に追求される点で一過性の気晴らしから区別されるもの」に依拠する。

2. 方法

2 (1). アンケート概要

2021年3月25日から4月3日にかけてWebアンケートを実施し、生涯的な演奏活動に関する実態調査を実施した。調査対象には、これまでの人生において仕事とは関係なくトータル5年程度以上の演奏経験があり、且つ、今現在も何かしら演奏を続けている個人と

設定した。調査実施に際しては、調査対象条件に該当する、筆者直接の知人および友人にアンケート回答を依頼すると共に、知人および友人のつながりにおいて調査対象条件に該当する個人やコミュニティを紹介してもらった。そのうえで回収データの質を担保するために、アンケートページの冒頭に、調査目的と調査協力条件を丁寧に記載し、また質問においてはスクリーニング項目を設けた。最終的な回収回答数は703、有効回答数は602となった。

2 (2). アンケート項目

アンケートは〈フェースシート〉、〈現在の音楽活動の状況〉、〈これまでの音楽活動経験〉、〈ブランクの状況〉、〈活動の継続動機〉の5つのテーマで構成した。〈フェースシート〉では、年齢、性別、職業、家族構成等について、〈現在の音楽活動の状況〉では、現在、主に取り組んでいる演奏種目（楽器）、音楽活動の形態、活動年数、演奏ジャンル、演奏時間、活動を継続する上での難しさ等について、〈これまでの音楽活動経験〉では、過去に演奏したことのある楽器の種類や演奏活動の形態、演奏していた時期や年数、活動環境や取り組み方について、〈ブランクの状況〉については、趣味として演奏をするようになって以降、3年以上演奏をしなかった期間がある場合をブランク有りと定義づけしたうえで、ブランクの有無や回数、ブランクに入った理由、生活環境の変化による影響の有無等についての回答を求めた。回答形式は選択式回答方法を中心に、一部自由記述回答方法を採用した。

2 (3). 分析の手続き

本稿では、アンケート項目内5つのテーマのうち〈現在の音楽活動の状況〉の質問項目から、具体的には「現在主に取り組んでいる演奏種目（楽器）」「現在の主な音楽活動形態」「活動を継続する上での難しさ」の回答内容に着目し、以下2つの分析を行った。なお「現在主に取り組んでいる演奏種目（楽器）」および「現在の主な音楽活動形態」は選択回答、「活動を継続する上での難しさ」は自由記述回答となっている。

分析1：生涯的な演奏活動を継続する難しさがどこにあるのかを明らかにするために、アンケート項目「演奏活動を継続する上での難しさ」に関する602名の自由記述回答につい

てKJ法を参考にカテゴリを生成した。分析の結果、11のカテゴリと46の小カテゴリを生成した。なお結果の記述においては、カテゴリ名は《 》、小カテゴリ名は〈 〉、回答本文からの引用については「斜体」にてそれぞれ表記する。当該ルールについては分析2の記述にも適用する。

分析2：生涯的な演奏活動を継続する難しさに、演奏活動形態の違いがどのように影響するのかを明らかにするために、質問調査の選択肢として挙げた9つの「現在の主な音楽活動形態」のうち、回答人数が少なかった「コミュニティでの社交としての演奏活動」および〈その他〉を除く7つの活動形態群

を分析の対象とし、活動形態群ごとに分析1で生成されたカテゴリに該当する回答数を集計し比較した。602名の回答者における「現在の主な音楽活動形態」の内訳については表1、活動形態別にみる演奏種目の内訳については図1～7のとおりである。

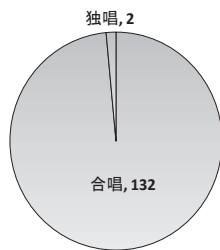


図1 合唱活動群 演奏種目の内訳 (人)

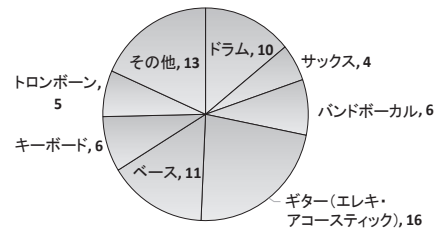


図4 バンド活動群 演奏種目の内訳 (人)

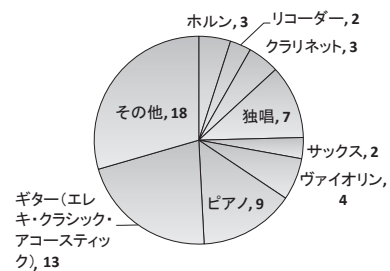


図5 個人での自主的な活動群 演奏種目の内訳 (人)

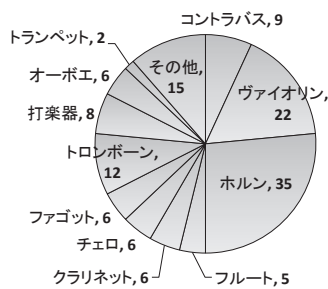


図2 オーケストラ活動群演奏種目の内訳 (人)

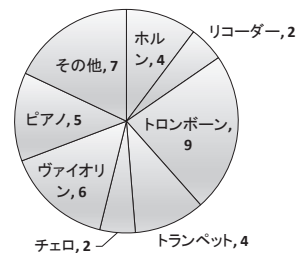


図6 アンサンブル活動群 演奏種目の内訳 (人)

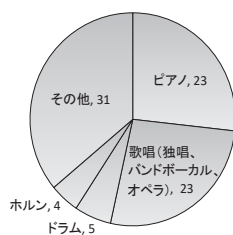


図3 指導やレッスンを受ける群 演奏種目の内訳 (人)

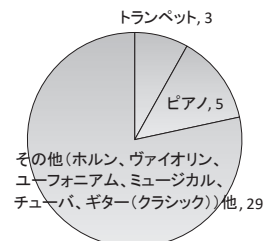


図7 サークル・同好会活動群 演奏種目の内訳 (人)

表1 現在の主な音楽活動形態 回答内訳

活動の形態	度数(人)
合唱活動	134
オーケストラ活動	132
指導やレッスンを受ける	86
バンド活動	71
個人での自主的な活動	61
アンサンブル活動	39
サークル・同好会活動	37
コミュニティでの社交としての活動	10
その他	32
合計	602

3. 結果

3 (1). 分析1の結果

分析の結果、「演奏活動を継続する上での難しさ」について回答した自由記述からは、11のカテゴリとそれらを構成する46の小カテゴリが生成された。一覧については表2を参照されたい。以下、結果について具体的に記述する。

《練習時間を捻出できない》は、個人で行う練習時間の確保が難しいという意味である。小カテゴリが7つあり、そのうちの6つが練習時間の確保を難しくさせる要因を示している。具体的な内容としては、仕事、家事、学業、育児、家庭生活全般、介護となっており、それぞれのライフステージで個人が担う様々な社会的役割との両立が、演奏活動を継続するうえでのハードルとなっていることがわかる。

表2 「活動を継続する上での難しさ」を意味するカテゴリ一覧

カテゴリ名	小カテゴリ名
《練習時間を捻出できない》	〈練習時間の確保が難しい(仕事)〉
	〈練習時間の確保が難しい(家事)〉
	〈練習時間の確保が難しい(学業)〉
	〈練習時間の確保が難しい(育児)〉
	〈練習時間の確保が難しい(家庭生活全般)〉
	〈練習時間の確保が難しい(介護)〉
	〈練習時間の確保が難しい〉
《モチベーションがあがらない》	〈モチベーションの維持(人前で弾く機会に乏しい)〉
	〈モチベーションの維持(仲間と合わせる機会に乏しい)〉
	〈モチベーションの維持(仲間との予定調整がスムーズでない)〉
	〈モチベーションの維持〉
《練習できる住環境にない》	〈家で練習できない(遮音の問題)〉
	〈家で練習できない(楽器がない)〉
	〈家で練習できない(楽器を置くスペース)〉
	〈自宅の近くに練習できる場所がない〉
《経済的な負担が大きい》	〈活動参加費〉
	〈移動費〉
	〈練習の場所代〉
	〈楽器のメンテナンス費・維持費〉
	〈楽器運搬費〉
《奏者欠員で活動が成り立たなくなる》	〈活動を継続できない(生活拠点の移動)〉
	〈活動を継続できない(仲間がやめていく)〉
	〈活動を継続できないメンバー(妊娠や結婚などライフステージの変化)〉
	〈合奏できる仲間がいない〉
《団体で活動するストレス》	〈団体運営〉
	〈人間関係〉
	〈合わせへの参加へのスケジュール調整〉

カテゴリ名	小カテゴリ名
《演奏に対する劣等感》	〈上達しないことへの焦り〉
	〈曲が難しくてできない〉
	〈自分自身の演奏への不満〉
	〈周囲についていけない〉
《音楽的興味関心の低下》	〈仲間との音楽的方向性の相違〉
	〈曲のマンネリ化〉
	〈一人で演奏することへの飽き〉
《COVID-19による活動の停滞》	〈コロナによる本番の中止〉
	〈コロナによって大人数で集まらない〉
	〈活動の鈍化〉
	〈コロナによって集まれる場所がない〉
	〈コロナの不安〉
《自分に適した活動環境が見つけれない》	〈自分に合った音楽コミュニティが見つからない（子連れの受入れなど）〉
	〈自分に合った音楽コミュニティが見つからない（音楽的なレベル・価値観）〉
	〈自分に合った指導者が見つからない〉
《趣味にしては負担が重い》	〈休日がなくなる〉
	〈音楽以外の趣味に費やす時間を捻出できない〉
	〈家族の理解〉
	〈体力の低下〉

《モチベーションがあがらない》は、演奏活動を継続する意欲が維持できないという意味である。小カテゴリは4つあり、そのうち3つはモチベーションの低下を招く活動状況の変化を示している。具体的にはそれぞれ、人前での演奏機会が減る、仲間と音楽を合わせる機会に乏しい、仲間同士のスケジュール調整がうまくいかないという内容である。

《練習できる住環境にない》は、個人練習をする場所の確保が難しい住環境にあることを意味する。小カテゴリは4つあり、自宅練習の限界に関する内容が3つ、自宅に限らず周辺地域を含め練習場所に困っていることを表す内容が1つである。自宅練習の限界に関しては、防音遮音対策がなされていない、スペースが狭小である、楽器を所有していないといった問題が挙げられた。周辺地域を含めたケースにおいては、自宅からアクセスしやすい距離において手頃な価格で使用できるカラオケ施設や貸練習室などが無いといった悩みが反映されている。

《経済的な負担が大きい》は、演奏活動を続けるにあたって必要な経費の捻出が難しいことを意味している。このカテゴリを生成する小カテゴリは5つあり、各内容は活動への参加それ自体にかかる費用、移動交通費用、個別練習のためのスタジオ費用、楽器のメン

テナンス費用、楽器の運搬費用である。演奏種目によって該当する小カテゴリに差異が生まれることが推測される。

《奏者欠員で活動が成り立たなくなる》は、バンドやアンサンブルなどといった演奏グループを編成する楽器の奏者に欠員がでることで、活動の存続が難しくなるという意味である。小カテゴリは4つ生成され、そのうち3つのカテゴリでは、転勤等による遠方への引越、結婚や妊娠等によるライフステージの変化、音楽活動に対する価値観の相違を要因として、演奏グループが解散していくことが読みとれる。また残り一つのカテゴリは、欠員を補うべく新たなメンバーを見つけることの難しさを示す内容である。

《団体で活動するストレス》は、集団行動としての演奏活動によって生じるストレスや問題の具体的な中身をあらわしている。小カテゴリは3つあり、それぞれの内容は、活動場所の確保や本番実施計画にかかる手間や労力、団体メンバー間の人間関係に関わる悩み、練習に参加するための予定調整の煩わしさを示すものである。

《演奏に対する劣等感》は、自分自身の演奏の質や水準に対して自信のなさや不甲斐なさを実感し、他者との比較においては劣等感に苛まれることを意味して

いる。小カテゴリは4つあり、それぞれ、自分自身の演奏に対する不満足感、上達しないことへの焦り、自分にとって難易度の高い曲目と向き合う辛さ、他者と比較した時にあじわう劣等感をあらわす内容となっている。

《音楽的興味関心の低下》は、音楽的な意味において自らの演奏活動に対する興味関心がうすれ、活動の継続意欲が低下していくことを意味する。小カテゴリは3つあり、それぞれ活動における音楽的方向性とのズレ、曲目のマンネリ化、個人練習への飽きを意味する内容であった。

《COVID-19による活動の停滞》は、コロナ禍の影響を受け、演奏活動の継続が困難になったことをあらわす。アンケートの実施時期が2021年3月とコロナウィルスの世界的流行から1年が経過しようとして時期であったことの影響が如実に捉えられるカテゴリである。小カテゴリは5つで、活動それ自体の鈍化を意味するものから、集まれる場所がない、集まること自体ができない、本番ができないという活動に生じている具体的な支障を表したものの、さらにはコロナに対する心理的な不安から演奏活動に消極的になることを表す内容とで構成されている。

《自分に適した活動環境がみつけれない》は、自分の価値観や考え方に合うコミュニティをみつかることができず、継続的な演奏活動に打ち込みづらくなることを意味する。具体的な小カテゴリは3つで、子連れ参加が可能といった活動のしやすさや、演奏における音楽的な納得感、さらにはよき指導者につけていることが、前向きな活動の継続に関わっていることが読み取れる。

《趣味にしては負担が重い》は、演奏活動が余暇の充実やリフレッシュにつながらず、むしろ負担と化してしまう状況を意味する。小カテゴリは4つあり、それぞれ負担の内容について示している。具体的には、休日にやすめない、他の趣味に時間をかけられない、家族の理解をえづらい、そして体力面での負荷が大きいといった意味を示す内容となっている。

3 (2). 分析1の考察

分析1を通じては、11のカテゴリおよび46の小カテゴリが生成され、演奏活動の継続に際しては個別多様な難しさが存在することについて改めて確認される結果となった。本項においては、11のカテゴリを概観し

意味的な共通性に着目することで、演奏活動における継続の難しさを成す根源的な要素について以下6点(下線部)を指摘し、その内容について考察する。

まず《音楽的興味関心の低下》と《演奏に対する劣等感》に見出される共通性に着目する。両者からは、自分自身の演奏活動それ自体に対する問題意識を有していることが表れている。自身の演奏に対する音楽的な探求心や納得感がうすまり、音楽的向上心が低下していくこと、すなわち活動継続の難しさを成す根源的な要素としては①音楽的向上心の低下が指摘される。

次に《練習時間を捻出できない》《練習ができる住環境にない》の二者からは共通して、今日的な社会生活環境において日常的に練習を行うことが難しいという実態が捉えられた。ごく一般的な生活をしながら毎日音を出すことは、時間的にも、住環境的にも、ハードルが高い。練習については、多くの個人が、様々工夫や努力をしながら時間を捻出しているというのが実態であり、そこには何かしらの妥協が伴っている。拙稿(2021)においては、練習時間を取れないことがブランクに入る主要因として指摘された。このことから②練習時間の確保のしづらさは、演奏継続を断念させる根源的な要素となっている可能性が高い。

《人員不足で活動が成り立たなくなる》《団体で活動するストレス》《自分に適した活動環境がみつけれない》の三者に共通するのは、人に関わる問題が内在している点である。このことから、音楽行為が根本的に人とのつながりや関わりをもって成り立つ性質であることが再確認されると共に、時に生じるコミュニケーションや人間関係のこじれといった③人間関係のストレスが、活動継続を苦痛にさせる要素となると推測される。

《趣味にしては負担が重い》《モチベーションが上がらない》の二者には共通して、思うように演奏を楽しめていない状況があり、余裕を持って楽しみたいという気持ちが趣味活動の前提に存在することがうかがわれる。具体的には、本番や音合わせなど活動に内在する動機づけ要因が乏しくなることや、演奏活動に費やされる時間が増え、生活全体のバランスがとりづらくなることで、演奏を趣味として楽しむことが困難になっているように読み取れた。こうしたことから、④趣味としての適度な楽しさの欠如は、活動の継続を難しくさせると推察される。もっとも趣味としての楽しさに何を求めるかは人によって異なるため、こと集団

での演奏活動において、全員が納得する「適度な楽しさ」を実現することは難しいと推測される。

《経済的な負担が大きい》と《COVID-19による活動の停滞》については、共に他のカテゴリと結びつけられる共通性は捉えられなかったが、いずれも、活動の継続を左右しうる重視な要素と思われる。

前者《経済的な負担が大きい》は、いわゆるお金の問題であり、演奏活動に関わらず、どのような活動にも共通して生じえる悩みといえる。一方、小カテゴリを参照すると、楽器の維持費、練習場所の借料費、楽器の運搬費など、演奏活動を趣味とするからこそその内容も確認される。具体的に該当する記述箇所を確認すると「オーガエのリードにかかるコストの問題」「演奏会への出演費、練習の為の交通費、クラリネットの楽器維持費（リード代含む）」といったように、演奏種目や活動形態が特定されている内容が比較的、目立つ。演奏活動にかかる費用は、活動特性や演奏楽器によって幅があることが推測されるが、⑤経済的な負担感も、活動継続の阻害要因であると考えられる。

後者《COVID-19による活動の停滞》は、COVID-19という⑥社会の有事による活動への影響があらわされている。2020年の幕開けからほどなくして世界に広がったCOVID-19によって、音楽活動は広く自粛を余儀なくされた。アンケート調査を実施した2021年3月時点では活動の制限が積極的になされており、また、COVID-19感染に対する心的不安も高かったことから、COVID-19が演奏活動の継続動機の低下を招いている様子が読み取れる。

以上、カテゴリの意味的な共通性から考察された、演奏を続けていく難しさにおける根源的な要素は、①音楽的向上心の低下、②練習時間の確保のしづらさ、③人間関係のストレス、④趣味としての適度な楽しさの欠如、⑤経済的な負担感、⑥社会の有事、の6点である。

3 (3). 分析2の結果

「活動を継続する上での難しさ」にみられる活動形態による差異をとらえることを目的に、分析1で抽出された、演奏活動の継続における難しさをあらわす11のカテゴリそれぞれに該当する各活動形態の回答数を集計し、活動形態ごとの比較分析を行った(表3)。以下に結果を記述する。

合唱活動群においてもっとも高い回答率だったのは

《練習時間を捻出できない》の31.8%、次いで高かったのが《COVID-19による活動の停滞》が26.5%、《団体で活動するストレス》が13.6%であった。合唱群においては主にこの3カテゴリへの回答が多く、その他のカテゴリについては回答率10%未満となった。

オーケストラ活動群で最も高い回答率は《練習時間を捻出できない》の42.4%であり、全ての活動形態群のなかでもっとも高い値である。次いでオーケストラ群において高い回答率だったのが《楽器の練習ができる環境にない》の15.2%、続いて《団体で活動するストレス》13.6%となった。

指導・レッスン群でも《練習時間を捻出できない》に一番多くの回答が集まったが、数値としては20.9%と、前述の合唱群やオーケストラ群と比べると、高い確率とはいえない。次いで《COVID-19による活動の停滞》が17%、《楽器の練習ができる環境にない》が14%という結果で、順番としてはオーケストラと同じである。その他のカテゴリにおける回答率は5%未満と低い数値であることが確認された。

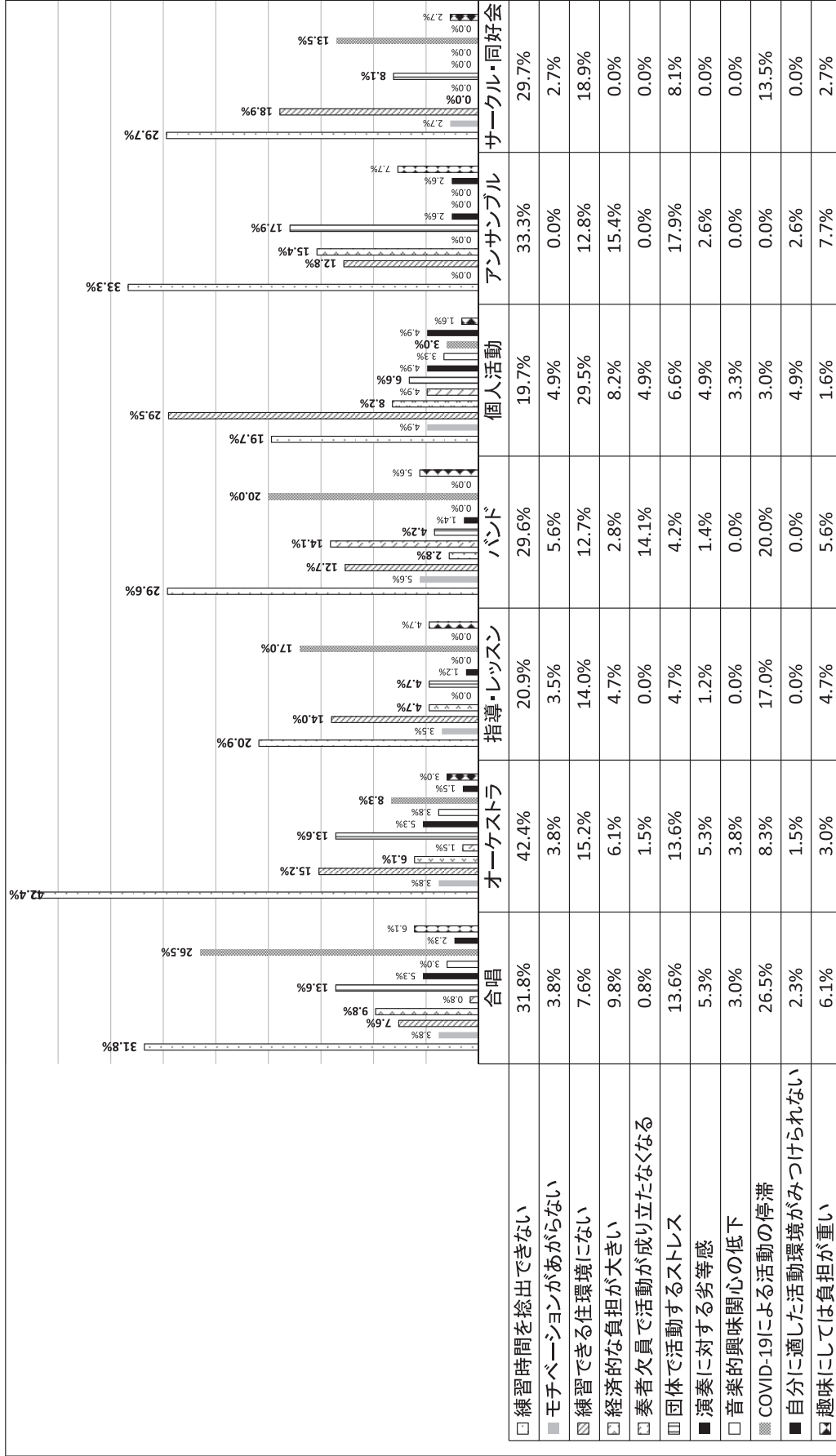
バンド活動群でもっとも高い回答率は《練習時間を捻出できない》の29.6%である。次いで多くの回答が集まったのが《COVID-19による活動の停滞》で20%、さらに《奏者欠員で活動が成り立たなくなる》の14.1%という結果になった。他の活動形態では《奏者欠員で活動が成り立たなくなる》への回答率は5%未満と非常に低く、当該カテゴリへの回答率が高かったのはバンド群のみである。

個人活動群では《練習できる住環境にない》の回答率が29.5%となり、唯一《練習時間を捻出できない》を最高回答率としない群となった。続いて《練習如時間を捻出できない》が19.7%と2番目に高い回答率となり、その他はほぼ5%未満である。

アンサンブル群の回答率は高い順に《練習時間を捻出できない》の33.3%、《団体で活動するストレス》が17.9%、《経済的な負担が大きい》が15.4%、《練習できる住環境にない》が12.8%という結果である。《団体で活動するストレス》と《経済的な負担が大きい》への回答率がそれぞれ全ての活動形態群においてもっとも高い。特に《経済的な負担が大きい》は全ての群において唯一二桁の割合となった。

サークル・同好会群でもっとも多くの回答が集まったのが《練習時間を捻出できない》の29.3%であった。その他10%以上の回答率だったカテゴリは《練習がで

表3 演奏形態別にみる「活動を継続する上での難しさ」の集計比較



合唱：n=134 オーケストラ：n=132 指導・レッスン：n=86 バンド：n=71 個人活動：n=61 アンサンブル：n=39 サークル・同好会：n=37

きる住環境にない》の18.9%、《COVID-19による活動の停滞》の13.5%である。以上が活動群ごとの結果である。

次に結果全体を概観する。まず個人活動群をのぞく6つの群において、もっとも多く回答が集まっているのは《練習時間を捻出できない》であり、とりわけオーケストラ活動群で42.4%、合唱群で31.8%、アンサンブルで33.3%という高い数値となった。

また《楽器の練習ができる住環境にない》の回答率が10%未満にとどまったのは、合唱群のみであった。歌うという行為は、楽器を置くスペースを必要とせず、比較的住環境条件に制約されにくいことがあらわれている。

《COVID-19による活動の停滞》は、合唱群とバンド群での回答率が特に高く、共に20%に達している。飛沫による感染拡大を防ぐ観点から、声をつかう演奏活動への制限が強く、社会的にも不安感情が強かった背景が、結果として如実にあらわれている。

一方《団体で活動するストレス》の回答率が10%を超えたのは、合唱群、オーケストラ群、アンサンブル群の3つであり、ある程度まとまった人数での活動体制が前提とされる群にて多くの回答が集まった。

活動群の固有性が捉えられたカテゴリは《経済的な負担が大きい》と《奏者欠員で活動が成り立たなくなる》である。《経済的な負担が大きい》はアンサンブル活動群のみ、《奏者欠員で活動が成り立たなくなる》でもバンド活動群のみにおいて、共に高い回答率となった。

《音楽的興味関心の低下》への回答率については0%が4群、残りの3群も5%未満であり、いずれも低値である。音楽的な興味関心の低下が、活動継続を迷わせるきっかけとなるケースは稀であることが明らかとなった。

3 (4). 分析2の考察

本項では分析2の結果をふまえ、趣味として演奏を継続する難しさには、活動形態の違いによって、どのような相違あるいは共通性が捉えられるのかを考察した。具体的な内容は以下3点に集約される。

第一に、趣味で音楽活動を続けていく際の最大の難しさは、練習時間の捻出にある。比較の結果、7つ中6つの群において最も高い回答率となったカテゴリが《練習時間を捻出できない》であった。このカテゴリ

における回答率が一番低かったのは個人活動群である。他群と比較し、自分のペースで音楽に取り組みやすく、練習不足で周囲に迷惑をかけたり、指導をいただく先生に申し訳が立たないといった思いにかられるシチュエーションが少ないと考えられる。とはいえ、個人活動群においても《練習時間が捻出できない》の回答率は20%と、高い値であることに変わりはない。どのような楽器を演奏するにしても音楽を続けるには日々の練習が不可欠となる。一方で、そのための時間を確保することは、仕事や育児、家事や介護に忙しい現代人にとって至難の業といわざるをえない。加えて《楽器の練習ができる住環境にない》への回答率が総じて高いこともこの問題に関与している。「家族のスペースに楽器を置いているので、夕飯後など弾きたい時に弾けない」「マンションで近所迷惑になりそうのため、音が出しづらい。仕事終わりの遅い時間こそやりたくなるのに」といった記述からわかるように、仮に夜半前の時間帯に仕事や家事がひと段落したとしても、多くの個人にとって、その時間を練習にあてるということは現実的に難しい。練習時間の捻出のしづらは、音出ししづらい日本の住宅事情によって、さらに拍車がかけられていると考えられる。

第二に、集団での演奏活動において感じられる活動継続における難しさは、所属する演奏団体の規模や特性によって、異なる。わかりやすいのは、団体での活動群である合唱活動、オーケストラ活動、アンサンブル活動ではいずれも《団体で活動するストレス》に多くの回答が集まっている点である。この結果からは、団体での演奏活動には、他者と音を重ね合い、一つの作品を創り上げていく喜びは大きいものである一方で、音楽それ自体とはまるで関係のない、団体運営に関わる問題や人間関係のトラブルによって、演奏活動継続を迷う事態に陥ることが少なからずあるということが再確認された。もっとも、同じ集団でもバンド活動群は、この例の限りではない。具体的には《団体で活動するストレス》への回答がないかわりに、《奏者欠員で活動が成り立たなくなる》への回答率が圧倒的に高いという結果であった。団体で活動する煩わしさとは無縁な一方で、メンバーに欠員が生じれば自然消滅の道にかたむいていくのは、多くのバンドが、団体というよりもむしろ音楽をしたい個人の集合体であるからではないだろうか。活動において、時に集団ならではの煩わしさが生じてしまうのは、音楽団体として

の活動基盤を維持安定させようという思いが根底にあるからこそも考えられる。いずれにしても演奏活動においては、一人で完結しえない部分に何物にもかえがたい豊かさがある反面、そこには常に他者との協同性が問われるゆえの難しさがはらんでいる。

第三に、COVID-19が活動の継続をおびやかす程度は、活動形態によって差があるという点である。具体的には《COVID-19による活動の停滞》の回答率が特に高かったのは、合唱活動群とバンド活動群の二者で、共に20%に達した。一方でアンサンブル活動群や個人活動群はいずれも5%未満となり、強い影響は確認されなかった。合唱活動群の具体的な記述内容をみていくと「合唱は三密でこそ成り立つから……」「飛沫感染の危険で全員集まれない」「ずっとマスクで歌えない」などがあり、コロナ禍において、大勢で声を合わせて歌うことで成り立つ合唱という演奏行為の特性上、活動継続が非常に困難であることがうかがわれる。バンド活動群における自由記述には「ライブは密になるので避けている」「コロナによってバンド活動(観覧含む)者の健康が脅かされる」「ライブができない」などがあり、ライブハウスやスタジオをはじめ活動拠点となる場所の多くが防音対策の観点から密閉性の高いつくりとなっていることが不安材料となり、活動に踏み切れなくなってしまった様子が読み取れた。現代社会の生活様式を一変させた COVID-19ゆえ、当然のことながら音楽活動シーンにも影響を及ぼしている。その上で、具体的な深刻さ、打撃の受け方は、活動形態や演奏種目によって異なるということが本稿を通じて明らかとなった。

4. おわりに

本稿では、二種類の分析を通じて、趣味として演奏を続けていく難しさはどこにあるのか、活動形態によってその難しさはどのように異なるのかを明らかにすることを試みた。その結果、分析1を通じては、演奏を続けていくにあたっては個別具体的な難しさが様々に存在することが確認され、それらを成す根源的な要素として①音楽的向上心の低下、②練習時間の確保のしづらさ、③人間関係のストレス、④趣味としての楽しさの欠落、⑤経済的な負担感、⑥社会の有事、の6点を指摘した。

分析2を通じては、練習時間の確保をはじめ、活動

形態に関わらず共通して捉えられる演奏を継続する難しさが少なからずある一方で、活動形態によって演奏を続けていく上での難しさには細かな異なりが生じる側面も確認され、それらは主に活動のベースとなる人数規模や、具体的な演奏内容(種目)の特性に依拠する部分が多いことが明らかとなった。

演奏活動における継続の難しさに指摘された根源的な要素の解釈を今後より深めていくことで、演奏という趣味活動に内在する特性をあぶりだしていくことができるのではないだろうか。その一方でどういった活動形態で、何を演奏するかによって、継続における難しさは様々であることが確認された。この結果については、趣味としての演奏活動の促進、あるいは生涯音楽活動の支援のあり方を考える際の足がかりに位置づけ、具体的な実践方法の検討へと展開させていくことを今後の課題としたい。

参考・引用文献

- Jorgensen, E.R. (2001) "What are the roles of philosophy in music education?" In *Research Studies in Music Education*, no.17, pp.19-31.
- Maria Manturzewskis. (1990) "A Biographic Study of Life-Span Development of Professional Musicians" In *Psychology of Music*, pp.112-139
- Jane W. Davidson, Michael J.A. Howe, Derek G. Moore and John A. Sloboda. (1996) "The Role of family influences in the development of musical performance." In *British Journal of Developmental Psychology*, Volume 14, Issue 4, pp.399-412
- Stephanie Pitts. (2012) *Chances and Choices: Exploring the Impact of Music Education*, Oxford University Press.
- 公益財団法人日本生産性本部 (2013) 『レジャー白書やめる理由はじめる理由—余暇活性化への道筋』 生産性出版
- 公益財団法人日本生産性本部 (2018) 『レジャー白書余暇の現状と産業・市場の動向』 生産性出版
- 杉江淑子 (1990) 「現代青年の音楽表現行動形成過程—ケース・スタディによる音楽歴分析を中心として—」, 『滋賀大学教育学部紀要』 第40号, pp.169-182
- 杉江淑子 (1995) 「成人のアマチュア音楽活動に関する調査」, 文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 杉江淑子 (2001) 「音楽的趣味・嗜好にみられる男女間の相違と形成要因—音楽の稽古事経験および家庭の音楽的環境の影響に焦点を合わせて—」 『滋賀大学教育学部紀要』 No.51, pp.107-118
- 杉江淑子 (2004) 「10代半ばの年齢層の音楽空間と音楽的趣味・嗜好の形成—社会的・文化的パースペクティブに基づく実証的研究—」 文部科学省科学研究費補助金基盤研究 C2研究成果報告書
- 杉江淑子 (2006) 「ポピュラー音楽活動者のインフォーマルな音楽学習—アマチュア・バンドのケース・スタディー—」 『関西楽理研究』 Vol.23, pp.69-87
- 杉江淑子 (2009) 「10年間の研究動向：生涯学習社会における音楽教育研究」, 『音楽教育の未来：日本音楽教育学会設立40周年記

念論文集』日本音楽教育学会編，音楽之友社

杉山昂平（2016）「成人の趣味における興味の深まりと学習環境の
関係—アマチュア・オーケストラ団員への回顧的インタビュー
調査から—」『日本教育工学会論文誌』42巻1号，pp.31-41

杉山昂平（2022）『興味の深まりを可能にする趣味縁に関する研
究：余暇研究と学習科学の融合的アプローチから』博士論文
（東京大学大学院情報学環）

総務省統計局『平成28年社会生活基本調査』

内閣府『高齢社会対策大綱』（平成30年2月16日閣議決定）

船越理恵（2018）『音楽経験の意味づけと職業行動への影響—演奏
を続けるMBAコース参加者による経験的語りを対象とした分
析と解釈—』

船越理恵（2021）「生涯にわたって継続される趣味としての演奏活
動の実態—継続の過程における「ブランク」に着目して—」
『東京立正短期大学紀要』第50号，pp.118-136

附記

本稿は、2020年公益財団法人北野生涯教育振興会の助成を受け
た研究成果の一部である。